

## 火によって

ターハルベン・ジェッルン著、岡真理訳（以文社、2015年2月）

## 虐げられてきた「誠実」

推薦・岡氏

岡 「アラブの春」といわれる一連のアラブ革命について、日本では2011年2月のムバラク大統領を退陣に追い込んだエジプト革命が一番強烈な印象がある。その引き金になったのがチュニジアの「ジャスミン革命」だ。10年12月、ベン・アリ大統領は逃走するが、その革命の導火線に火を付けたのがチュニジアの地方都市に暮らすムハンマド・ブアズィーヌイ青年。軽油をかぶり、火を付けて一命は取り留めたが、数週間後に亡くなり、結果的に自殺となった。その衝撃をテーマに、作家が想像力で書いた作品だ。小説の主

人公ムハンマドとは大きな違いがある。小説では、大学出の実直な青年。イスラム社会で誠実に生きることはイスラムの教えに則って生きること。しかし、実直に生きる限り腐敗した社会の中では虐げられる。エジプト革命のスローガンは「パンと自由と人間の尊厳」。人間の尊厳を踏みにじられた者の、最後の尊厳の証として彼は、他者を傷つけるのではなく自身を燃やすという行為に出た。実際のムハンマド青年は中等教育も終えておらず、弟妹を学校にや

るため行商をしていた。エジプトにせよチュニジアにせ

よ、親米国家である限り米国は非民主的な政権を支援する。独裁体制の中で虐げられ、人間の尊厳を踏みにじられる者たちにとっては、独裁もそれを支える米国も一体だ。無数のムハンマド青年がおり、イスラムの教えを守りながら、怒りが他者を傷つけるのではなく自身に向かう。ムハンマド青年のような者にとっては、暴力的に設定された法制度を守るメリットは何もない。法自体が、西欧の植民地主義、帝国主義的な暴力によって作られたものなのだとして、それを破壊していくことは非常に魅力的であろう。ムハンマド青年の周りの、一定数の人たちが義勇兵として、イスラムの教義に向かう、潜在的な義勇兵になり得るといことが、見えてくる。

本村 ムハンマド青年はISに参加したのだろうか。岡 しないだろう。聡明な人間だ

だったので、不正の根源が何か分かっていて、軽油をそこにぶつけて火を付けることもできたが、自分を犠牲にした。だからこそ一連のアラブ革命になるような衝撃だった。そうであればただの暴徒の焼き討ちで終わっていたかもしれない。

## 慈悲深さといじめ

本村氏

本村 主人公が火を付けた後、守衛が「俺が助けてやらなきゃならなかったのに……」と言う。彼は加害者なのに、その場面では「俺のせいだ」と泣いた。恐らく、イスラムの教えを守ってれば、なぜこんなことをしてしまったのかという後悔があるのだろう。作家の想像力があるにしても、感性的に被害者の立場、その時代を越えてきたことが実感できるの、非常に大事な本ではない

か。ただ、コーランの教えが「人のために」と慈悲深いのに、なぜいじめめるのか、別の意味で興味がある。岡 イスラムが忘れ去られているからだと思う。私がエジプトに留学していたのは1980年代初頭だが、当時は日本の昭和30年代だと思えばいいと言われた。それが、モノが氾濫し、物質主義的になっていく一方で、闇も濃くなっていった。時流に乗って成功するのは、イスラムなんて関係ないという人。イスラムが禁じている酒や女、ポルノを商売にする人々。反対にイスラムの教えを守って生きている者たち、ムハンマド青年のような人々は構造として浮かばれない。イスラムの教えを守るほどバカを見る。そうした中で、自らの肉体に火を付けるしかない者たちや、その後追い自殺する者たちもいれば、社会の法自体がイスラムの教えを守っていないので、制度外で

武装闘争を行う者たちも出てくる。橋爪 類似で言うと「サアカル」は自分の心の世界が一番大きな救済目標になっていて、大きな他者とか将来世代とか、そういう大状況に責任を持つつもりは初めからない。自分の存在理由や意味世界に集中している。他者と断絶していいんだと思うから暴力に移る。ISに集まる人は、そういう風に追い込まれている人が多い。いじめられているわけでも偏見にさらされているわけでもなく、単に高学歴で、自分がいじめられていると勝手に思った人もいる。日本も小泉改革以来、ほとんど同じ状況だ。ISはオウム真理教との共通点が多いと指摘される。日本国内にも、本来ならISに共鳴するエネルギーがないとは言えない。しかし、オウムで懲りていること、イスラムが遠いことから、共鳴運動はほとんど起こっていない。